特色ある地域産業

中部 ものづくり探訪

遠州のコーデュロイ

地域の資源や技術を活かし、特色ある製品づくりを行っている企業群を「地域産業」として紹介します。

コーデュロイの産地として名高い遠州地域では、伝統の技をもとに、多彩な柄を紡ぎ出す革新的な取り組みが展開されている ☆

国内屈指の織物産地から世界へ、伝統産業の挑戦

伝統の製織技術を活かし、国内随一の産地へと成長

1 帆布づくりが礎となり コーデュロイの製造に成功

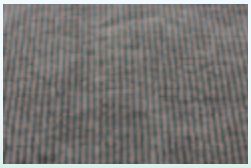
静岡県西部に位置する遠州地域。ここは、愛知県の三河、大阪府の泉州と並ぶ日本三大綿織物産地の一つとして知られている。産地の特徴としては、綿織物づくりに適した気候風土があげられる。遠州地域の温暖な気候と、海からの湿った空気がもたらす適度な湿度は、糸が切れにくい安定した製造環境を生み出す。また、天竜川を境とした東西産地それぞれに発展の歴史があり、江戸時代から厚手織物の製織技術のあった東の磐田地域はコーデュロイ産地、薄手織物の製織技術のあった西の浜松地域はシャツ産地へとそれぞれ発展を遂げた。特にコーデュロイにおいては、遠州地域が国内生産量の約90%を占めていると言われている。

遠州地域のコーデュロイ製造は、磐田市における織物産業の歴史から始まる。1600年代、遠州国磐田郡（現・磐田市）は舟運で栄えた掛塚湊（かけつかみなと）や福田湊（ふくでみなと）を擁する帆船の集積地であったことから、帆布を製織する機屋が存在し織物産業が形成されていた。その後、1831（天保2）年、磐田郡福田（ふくで）村（現・磐田市福田）の庄屋・寺田彦左衛門が、大和地方を旅した際に目にした雲斎織（足袋底などに用いる丈夫な木綿の布）を気に入り、その技術を移入したことにより福田地域の製織技術は発展を遂げた。

帆布や雲斎織など厚地を織る技術が整ったことで、コーデュロイ産業は興った。1896（明治29）年、山名郡福島村（現・磐田市福田）の寺田太助・寺田秀次郎が、当時下駄の鼻緒の材料として大人気だった輸入

太陽王が認めた由緒正しき綿織物

コーデュロイ（英名：corduroy）の語源は、フランス語の「王様の畝（Corde du Roi）」。縦方向にけば立った畝のある主に綿の織物のことで、太陽王と呼ばれたフランス国王・ルイ14世（1638～1715）が、保湿性・耐久性に優れた同生地を、庭師の制服素材として取り入れたことからその名がついたと言われている。日本では「cord」＋「天鵞絨（てんがじゅう）（ビロードの和名）」が転じて「コール天」とも呼ばれている。☆



コーデュロイの研究を重ね製織に成功。その後、その技術は現在の袋井市、掛川市へと広まり、福田地域を中心とするコーデュロイ産地が形成された。

2 生産拡大を支えた自動織機、国内外の需要拡大を受け一大生産地へと発展

1900年代に入ると、コーデュロイ製織をはじめとした遠州地域の織物は大きな発展を遂げる。その立役者の一人が、(株)豊田自動織機製作所(現・(株)豊田自動織機)を創業した豊田佐吉だ。1896(明治29)年に木鉄混製の豊田式汽力織機が完成したのを皮切りに高性能化が進行。その後、佐吉は1924(大正13)年にG型自動織機を完成させ、ヨーロッパ諸国の後塵を拝していた織機の性能を世界最高に引き上げた。このG型自動織機とその後継機は織物の生産性を飛躍的に高め、遠州地域の織物産業の発展に貢献した。

大正時代には綿布の輸出が盛んになり、コーデュロイの輸出も活発化。当時好景気に沸いていたアメリカへの輸出量の増加に伴い、産業は成長していった。その後、第一次世界大戦時には、戦火に見舞われたヨーロッパ諸国におけるコーデュロイの生産能力低下を受け、ヨーロッパへの輸出の伸びが顕著になった。さらに、ヨーロッパ諸国からコーデュロイを輸入していた東アジア・東南アジアにも進出。特に中国市場において輸出量を増やしたことにより、産業は大きく発展していった。

また、国内における洋服需要が高まった昭和初期には、東京・大阪という二大消費地の中間に位置する地の利を活かし、遠州地域は日本一のコーデュロイ産地となり活況を呈した。

しかし、1970年代頃から発展途上国の安価なコーデュロイの輸出が増加。活況から一転、国産コーデュロイの需要は減退した。さらに、アメリカによる日本製繊維製品の輸入規制を受け、政府は国内繊維事業者の損失を補填することを目的に、1971(昭和46)年から1987(昭和62)年にかけて「織機買い上げ措置」を実施。これにより、遠州地域においてもコーデュロイ産業から他産業へと事業転換する事業者が増え、産業規模は縮小した。

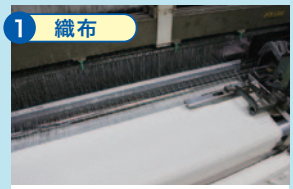
また、海外製品との競争においても、近年価格面では劣勢を強いられており、高価格帯アパレルブランドにターゲットをシフトするなど、国産コーデュロイの取引先は限定的になりつつある。このような厳しい市場環境も要因となり、1973(昭和48)年のピーク時には1,620社を誇った天龍社織物工業協同組合※の組合員数は、2015(平成27)年には85社にまで減少した。製造工程に分業制を敷くコーデュロイ産業においては、極端に事業者が減少している工程もあり、仕上げ工程の毛焼きを専門で担う事業者は1社にまで減少。隆盛を極めた地場産業は危機的状況に陥っている。

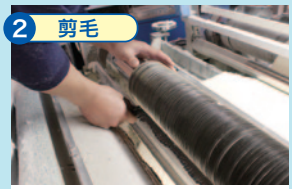
これまでも打開策として、2005(平成17)年のJAPANブランド育成支援事業の補助金を受け、軽さと柔らかさが特徴のコーデュロイ生地ブランド「ソルブレベコ」を福田町商工会(現・磐田市商工会)が立ち上げた。また、2014(平成26)年には地元大学・磐田市・天龍社織物工業協同組合が新たなブランド創出を目指して連携事業を実施した。しかし、需要喚起に繋がる新製品・ブランド開発には結びつかず、苦しい状況は続いている。

廃業が後を絶たず産業構造が崩れていく状況のコーデュロイ産業。そのような中、再興を目指し立ち上がったのが(有)福田(ふくだ)織物だ。織物の一大産地・遠州が築き上げた技術力に、日本独自の「デザイン力」を組み合わせた新たな取り組みとして、ファッション業界の潮流を捉えたブランド設立・製品開発を始動している。

※天龍社織物工業協同組合:福田地域を中心とする磐田市、袋井市、掛川市の織物製造業者で構成

コーデュロイの製造工程


1 織布
織機を使い経糸と緯糸を交差させて布を織る


2 剪毛
畝状の緯糸を中央でカットする

3 毛焼き
カットした緯糸を焼いて毛並みを揃える

4 染色整理
不純物を取り除き染色する

※天龍社織物工業協同組合「TENRYUSHA TEXTILE INDUSTRY」より ☆

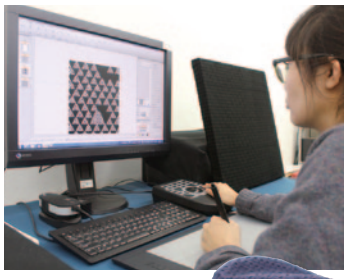
伝統と革新が融合した製品が見出す、産業再興の兆し

3 日本独自の意匠を紡ぐ新たなコーデュロイブランド

（有）福田織物が展開するコーデュロイブランド「BECCO（ベコ）」。分業制が一般的なコーデュロイ産業において、生地の企画開発から製造（剪毛・毛焼き工程は除く）・販売までを一貫して手掛けており、一般的なストライプ柄とは異なる幾何学的なデザインと従来の生地の半分ほどの軽さが特徴のコーデュロイを生み出している。

同ブランドは、遠州地域のコーデュロイ産業の活性化を目指し2015（平成27）年に設立。コーデュロイに特化した新ブランドを立ち上げた背景について福田靖代表取締役は「磐田市をはじめとする遠州東部は、コーデュロイ産業があったからこそ発展することができた。『BECCO』は未来型コーデュロイとして、産地に再び活気を与える存在を目指している」と語る。

現在は、同ブランド生地を素材とした衣服やバッグ、ファッション小物などの製品開発にも取り組んでおり、さらなる活動分野の拡大が期待されている。



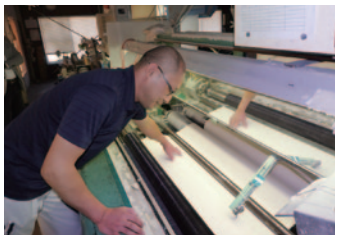
↑若手社員の既成概念をくつがえす感性により「BECCO」の独特の模様は生み出されている ☆

↗「BECCO」の生地を素材とした製品は、特徴的な柄が映える洗練されたデザインが特徴 ☆

4 伝統の技術の深化を目指す新たな生地づくりへの挑戦

新規性のあるブランド展開が始まる一方で、伝統の技のさらなる発展に挑む動きもある。コーデュロイ製造における剪毛工程を担うカネタカ石田（株）だ。

1972（昭和47）年に創業した同社は、高い水準を誇る剪毛技術を活かし、一見するとコーデュロイに見えないほど畝の細かい生地の製造や、浜松工業技術支援センターと協力して畝と畝の間隔が広い生地の開発に着手。石田大輔代表取締役は剪毛業界では若手の40代であり、産業を牽引していく存在として新たな挑戦を続ける。「剪毛事業者は、織布事業者と比較して人数は少ないが、同業者間で切磋琢磨しながら、これからもさらなる技術向上を図っていきたい」と将来に向けた意欲を語る。



一畝ずつ手作業でガイドニードルを通し、パイルを切る剪毛工程

5 「技術」と「勘」を強みに、再び世界から注目される存在へ

遠州地域のコーデュロイ産業における新たな挑戦は、現代に至るまでに蓄積されてきた職人の「技術」と「勘」により支えられている。

石田氏は技術力について「近年は従来品より細い糸を使用した生地製造など、剪毛事業者に求められる技術水準が高まる中、多様な依頼を実現している。難易度の高い作業依頼にも応えられる技術力の高さが、当産地の強み」と語る。また、福田氏は「コーデュロイは織機があればつくれるというほど簡単な織物ではない。織機の稼働具合を見極め微調整していく職人の繊細な『勘』が、品質の高いコーデュロイづくりには不可欠」と感覚の重要性を説く。

こうした長年の経験に裏打ちされた高い技術を素地として先進的なデザインを実現した「BECCO」は、国外に向けて積極的なPR活動を展開しており、日本が誇る製織技術の高さと、今までにない多彩なコーデュロイの魅力を発信。年２回のイタリア・ミラノで開催される展示会への出展を通じて、ルイ・ヴィトンやランバンといった世界的アパレルブランドから注目を集める存在となっている。「展示会では品質の高さが認められ、多くのサンプル依頼が寄せられている。また、世界的に温暖化が進んでいる現状を受け、薄さと軽さが特徴の一つである『BECCO』製品の需要は高まるはず。今後は、フランスやアメリカの展示会にも進出し、同製品の魅力をアピールしていきたい」と福田氏は語る。

地道なＰＲ活動により、海外進出への足がかりは着実に築かれている ☆

次世代とともに挑む、伝統産業の活性化

6 世界に照準を合わせた新たな挑戦は、若き力を携えて進んでいく

新たな試みが生まれる遠州地域のコーデュロイ産業。一方で、従事者の高齢化と後継者不足も進行している。(有)福田織物では平均年齢30代前半の若手社員が中心となり、伝統の技を次世代に継承するための活動を展開。実践の場を通じて経験を積ませ成長を図っている。また、あわせて技術継承の場として、「ミスターコーデュロイ」と呼ばれる長年コーデュロイ産業への技術支援を行ってきた浜松工業技術支援センターの元研究員を指導役として招き、定期的に勉強会を開催。伝統の技は次世代の事業者へと継承されている。

若い人材は、既存産業にはなかった独自の発想をもたらし、新たな風を吹き込む存在。その重要性について福田氏は「当社の若手社員は、現時点においても産業発展に貢献している。常識に捉われない新たな考え方やアイデアを提案し、いままでにない斬新で可愛らしいデザインを開発している。次の世代を積極的に登用し活躍の場を与え、若者にとって魅力的な産業となれば就職希望者も増える。今後は若者が一層活躍できる環境の整備に努めていきたい」と話す。

長年にわたり培われてきた伝統の技は、若い人材へと継承されていく ☆

「BECCO」は新たな動きを見せ始め、昨年8月にはカネタカ石田(株)が同ブランドの活動に参加。事業者間での連携の輪は着実に広まっており、繊維のまちが生んだ新たな挑戦は、地域活性化・産業発展を目指し歩みを進めていく。「『BECCO』というブランド名は、遠州地域で呼ばれていた別珍・コーデュロイの愛称である“ベコ”に由来する。この取り組みを通じて、コーデュロイの一大産地であった遠州発のブランドとして世界に向けて発信していきたい。そのためにも、まずは知名度を高め、海外市場の開拓に繋げていく」と意気込む福田氏。今後は麻やシルクを原料とした、夏服にも対応できるコーデュロイ生地の開発にも挑戦していく。

磐田市も地場産業継続を目指し、尽力する事業者への支援を惜しまない。「事業者の減少を食い止め、産業を継続するため、新たな施策を通じて現状打破に挑む事業者へ積極的に支援する仕組みづくりを進めていきたい」と磐田市商工観光課の土井雅哉副主任は語る。

輸送用機器や楽器など多彩なものづくり産業が集積する遠州地域。安定して働く場所も多いこの地で、コーデュロイ産業が次なる担い手を確保し、事業を継続していくことは容易ではない。

しかし、伝統の技と次世代の力を編み込んだ新たな挑戦は、人々の目を惹きつける多彩な魅力を放ち始めている。産地が生き残っていくために、高い技術とデザイン力を武器に進化を続ける遠州地域のコーデュロイは、世界から再び注目を浴びていくことだろう。

取材協力・資料提供:(有)福田織物、カネタカ石田(株)、天龍社織物工業協同組合、磐田市、はままつシャツ
写真提供:☆印 (有)福田織物

コーデュロイの活用も視野に入れた、「シャツづくり」を中心としたまちおこし
はままつシャツ

遠州地域で活動する織物事業者や作家、小売店が集まり、古くから綿織物の産地として栄えた浜松市を「シャツのまち」として盛り上げることを目的として2012(平成24)年に結成。遠州織物を素材としたシャツなどのファッションアイテムを制作し、春と秋には販売会やファッションショー、遠州織物ゆかりの地巡りなども開催している。はままつシャツの水野さえ子代表は、北海道から浜松市に移り住んだ際、まちなかに響く織機の音を通じて遠州の織物産業の存在を知り、長女の出産を機にミシンを踏み始め、地元で生地のまま処分されていく場面と度々出合う中で遠州織物への関心を深めていった。現在は、はままつシャツの活動と並行して自身のブランドでコーデュロイを素材とした製品も制作している。「遠州地域のコーデュロイ産業は現在も確かな技術をもった職人により継承され、素材感も日々進化していると感じる。今後は当組織においても、コーデュロイを素材とした製品は増えていくのではないか」と話す。

はままつシャツでは、コーデュロイを素材としたスヌード(筒状のネックウォーマー)も制作